
東都大学大騒動after ~ 新一の波乱万丈な一日

楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東都大学大騒動after 新一の波乱万丈な一日

【Nコード】

N6126B

【作者名】

楓

【あらすじ】

東都大学祭を舞台にした新一視点のお話。新一の知らない所で話題になっていく哀に新一は…… 一日シリーズ『東都大学大騒動』平次と哀の一日』の続編。 新一視点なので新哀チックですが、ベースの話が平＋哀なので新一ヤキモチ話。 哀嬢至上。 後編には白い怪盗さん出演。 オマケの様にサラッと読んで下さったら嬉しいですよ。 読んでない方への『東都大学』平次と哀』のあらすじ 平次の誘いで大学祭にやって来た哀。 平次の友達にスカウトされ小学生なのにミスコンに出るハメに。 その舞台で、後に全世界を駆

ホントかよ
け巡る出来事が起きる話

前編〱オメーら毎回毎回大概にしるよ！（前書き）

話の都合上、何年たつても目暮『警部』です（笑）↑出世したら
なかなか現場で会えませんから（^^）；

新一が相変わらずハイテンションですので、そちらに対する苦情
もお許しください！

前編　オメーら毎回毎回大概にしるよ！

『栄えある、本年度ミス東都の栄誉を掴んだのは
ーナンバー１０番！灰原哀ちゃ　　ん！！！！』
エントリ

ブハアッ！！

――開け放たれた窓から地鳴りの様な凄まじい歓声が聞こえて
きた――

年に一度の東都大学祭。

世間での評判の良さから、数少ないチケットはプレミアがついて売買されている状況だ。

オレは以前から何度も念押しされ約束させられていた蘭と園子を呼んだ。

園子には『急に夕方まで用事が出来て行けなくなった』とドタキャンされ、用事があるなら仕方ねーなど、蘭と一緒に朝からゆつくり学内を見てまわった。昼からは“工藤新一”の名前だけ貸している（幽霊部員とも言う）推理研究会の方でも手伝おうかと思っていたら、案の定いつの間にもやら事件に巻き込まれてしまっていた。

今日は大学祭という事もあり秘密裏に警察が呼ばれ、幸い事件自体は単純で、服部を呼び出すまでもなく直ぐに解決。

解決はしたのだが、今回の犯人の動機に心底脱力して（オレの関わった事件の中でワースト1のレベルだ）、全てが終わって警部達が帰った途端、精神的にドツと疲れてフラフラと推理研究会の部室に転がり込んだ。

やっとゆつくりできると、部費で奮発購入したソファに身を沈めて、コーヒーを飲もうと口に含んだその瞬間。

あのトンデモナイ台詞が大音量で聞こえてきやがった。

「し……新一！？大丈夫！？」

「う…ゲホガハっ……………ら、蘭、水……………」

「ちよつと待って——はい、新一飲める？」

「だ…だいじょ……………」

受け取った水を勢いをつけて飲み干す。大きく息をつき、グラスをダンツとテーブルに叩きつける様に置く。

ナンダ今の。

『ハイバラアイチャン』？

確かに聞こえた。

『ハイバラアイチャン』って、あの『灰原哀』の事だよな？

『最近ますます大人びて家族思いで大変器量良しで見ていて微笑ましいと噂好きなご近所の間でも大評判な灰原哀』の事だよな???

でも灰原は直接東都大に関わりなんてねーハズだし？やっぱ呼ばれたのは別人か？

確かこの時間帯、メインキャンパスでは毎年恒例『ミス東都大学コンテスト』が開催されていたはず。

今年司会担当の仲田がしつこい位に誘ってきたから覚えている。今朝なんて蘭の顔を見た途端速攻スカウトしに来やがった。なんでも今年から始まった一般参加枠に希望者が少なえみてーで。でも蘭は先週『準ミス米花大』に選ばれたらしいから、流石にタイトル持ってるコはマジイだと断ったんだが。そーいやあの件はどうなったんだ？

オレが思わず動きを止めて考え込んでしまっている隣で、蘭は先程ダイナミックに噴出されたコーヒーを拭きながら、真新しいハンカチを手渡してくる。

「突然どうしたのよ新一、驚くじゃない！顔、物凄い事になってるから早く拭いた方がいいよ？……………ところでさっき、『ハイバラアイちゃん』って聞こえたんだけど……………まさか気のせいだよね？」

「……………オレにも聞こえた」

言いながら凄まじいスピードで携帯を操る。呼び出し音が何度か流れ

「……………くそっ！服部も灰原も出やがらねえ！」

窓に駆け寄り身を乗り出し、声の出処と思われる場所を見る。
異様な盛り上がりの中のメインキャンパスは見えるが、ステージの上は大掛かりなセットが邪魔をして此処からでは全く見えない。
先程からの歓声は止むことはなく、むしろ大きくなってきている。
過去三回、大学祭には参加してきたが、かつてない程の盛り上がりじゃねえのか？とにかく凄え。

「ちつくしよー！何がどうなってんだ！？」

メインキャンパスに行くか？行かざるべきか？？オレが窓と扉の間を熊の様にぐるぐると往復して悩む間に

『お姫様抱っこ』

とか

『哀ちゃん！ご指名』

とかノーテンキでハイテンションな声が聞こえてくる。

極めつけ

『東都大4年、服部平次君！！君が勇者ダ

！！』

地鳴りのような歓声悲鳴ブーイングが大学中響く中、堪らず教室を飛び出しかけたオレを蘭が『ちよっと新一！？』と引き留める。蘭！わりーけど今非常事態なんだ離せ頼む！行かせてくれ！！

そう胸の奥で叫ぶオレの耳に、ダメオシの台詞が飛び込んできた。

『ミス東都！彼を勇者に選んだ理由は！？』

『いつも抱いてもらってるから』

.....
.....
.....
.....
.....。

「服部イイ

!!!!!!」

!!テメエ

瞬間移動の如く窓に身を翻し『ガラピシャン!』と隣の窓を全開、窓枠に手足をかけてオレは心の底から叫んだ。

——同時にメインキャンパスを中心に、人が発したモノとは思えないレベルの絶叫が響き渡った——

今、オレの目の前に大人しく座っている二人。

秋らしい綺麗な夕焼けの広がる中、服部は灰原を連れて推理研究会に『出頭』してきた。『自首』だ。オレからは逃げられないと踏んだらしい。なかなかのいい判断と心がけだ。

「……で、どーいう事だ」

「どうって言われても困るわ」

「灰原ア！他人事のフリすんな！なんだアレはなんだアノ騒ぎは！オメー連れて歩いたら、身動き一つ取れねえってどういう事だ！！？」

こいつら二人が『自首』してきて速攻、首根っこ引つ掴まえて連れて帰ろうと学舎を出た。途端、スゲー人垣に囲まれてどうにもならねー。取り敢えず、夜に園子と約束があつた蘭だけは何んとか帰す事が出来たが、オレ達は身動きもとれねー。帰ろうと思つてもゼツテー帰れねーぞコレ。

「知らないわそんなの」

「ッ
服部
いい
いい！」

「ぐお 巻き添えかい!？」

「しらばつくんなオメーも共犯いやゼッテー主犯だろーが!!」

「く…工藤まあ落ち着かんかい」

「早死にするわよ」

「誰のせいだ
!!!」

さ：叫び過ぎて疲れた。間違いないく運動不足だ最近。

落ち着けオレ。こーいうのはアレなんつーんだ、悟りの境地ってやつだ。深呼吸。

「灰原」

お、無の境地到達。スゲーぜオレ。

「なにかしら」

「さっきから気になってたんだが、膝の上にあるブランドの袋はなんだ」

「なんだって言われても、見たままなんだけれど」

「プラダとCHANELに見えるんだが」

「あら正解」

「……………まさかありえねーと信じたいんだが、その膝の上のプラダとCHANELを餌にどつかのノーテンキ司会者にスカウトされてホイホイ出場したんじゃないだろうな」

「別に好き好んで参加はしてないけれど。まあほぼ正解かしら。流石は“平成のホームズ”さんね」

「……………」

……………ッだあ

！ザケンナなんだコイツラ！？

悟りが何だ！無の境地が何だ！！コイツラ相手に辿り着けっかよ無理だ無理無理！！

ちつくしよー苛々しやがる駄目だ一旦落ち着こう。一息つかねーと体力が追っつかねえ……………テレビテレビ——っつと。

『キッドの長年の恋のお相手は、本年度ミス東都の女性Aさん。消息筋によるとこの女性は、米花市に住む……………』

ブチッ

……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………
……………

「……………とりあえず消息筋ってなんやねん」
「なあ？そっ思わんか？ツツコミ処が多すぎて笑えんっちゅーねん最近のニュース番組はアハハハハハ——」

——冷汗をダラダラ流しながら視線を決して合わない服部。電源を落としたテレビのリモコンをさりげなく後ろに隠していやがる。オメーはホントワカリヤスイ奴だよな。そんなにオレの目の前に飛び道具置くのは危険か。そーいうオメーの坎の良いとこオレは嫌いじゃねーぜ。事件の時なんかサイコーに愛おしいさ相棒。しかし巷で有名な一般論じゃ、愛は時として憎しみに変わるらしいけどなふふふふ。

「服部」

「へい!??」

「説明しろ」

「イヤ説明言われても、あの通りやねんけど」

「灰原」

「何かしら」

「オメー内緒でキッドに会ってるのか」

「そんな訳ないでしょ」

「じゃあ『友達』ってなんだ」

「軽い冗談よ」

「.....」
「.....」

海よりも深い沈黙の広がる中、ついにオレの堪忍袋の緒が切れた。

「オメーら馬鹿か
トで放送されてどーすんだ

！！！自覚あんのか！！？全国ネット
！！！！」

「大丈夫よ。義務教育中の未成年だったから流石にモザイクかかってたじゃないアレ」

「そんな問題じゃねーだろうが！灰原だいたいオメーの冗談は昔からビミョー過ぎて笑えねーんだよ！！今だから言っちゃうが『P & A』の暗号に『ピストルとアサシン』とか回答するかフツー！？もつと可愛げある回答が他にあんだろが！」

「.....工藤君あなた本当に失礼ね」

「せやで工藤、大阪人にとってソノ言葉は人間失格言われるんと同じや！哀ちゃんもたまーに可愛いギャグもきっちり言うんや！謝らんかい！」

「.....私は大阪人じゃあないし服部君あなたもさりげなく失礼極まりないわよね」

「まあまあ怒りなや」

よーしよしと頭を撫でる服部に、止しなさいよと顔をしかめながらも心底拒絶はしない灰原。

——本っ気でブチ切れっぞオレは。

そんな陰悪な雰囲気の中、開け放たれた窓の外から呑気な声が聞こえてきた。

「おーい、勇者服部ー？居るかー居るなら返事しろーロリコン勇者服部いーー！」

「恥ずいっちゅーねん！！何や！！？」

服部がコントか何かみてーに飛び上がって、窓から身を乗り出して叫び返した。……どーでもいいんだがナンだ今のネーミングは。勇者ってナンだ。新たなプレイか。ロリコンで勇者なのかそーなのか。

「おーいたいた！後夜祭どうすんだー？勇者仲田が勇者服部と姫にも出て欲しいって探してたぞー？」

「……何やねんその勇者や姫って」

「なんだよ知らねーの？すっげー盛り上がってんぜ？剣道部の『未だに現役4年生主将副主将コンビ』は、真の勇者だったって。もう

入部希望者が続出。剣道部は『勇者養成所』だとか『男塾』だとか
って噂が流れまくって忙しいのなんのって……」

「……」

お前ら早く来いよな」と去って行く、見知らぬ剣道部員A。このサ
イコーに記憶力の良いオレにもわかんねーよA。誰だよA。思わず
オメーにツッコむくらいオレは疲れてんだよ悪かったなA。

「……勇者服部」

「イヤ真の勇者服部らしいで」

「言い遣す事があれば聞いてやる————ないか。そうか。」

「ちょい待ち！イヤまだ何も言うたらへんやろ！？しかもその『遺
言ツッコミ』昔から何度も聞いたるわ！同じパターンやないかい！
！」

「なかなか工藤君もツッコミに捻りがないわね……」

「ツッコミじゃねーんだからあってたまっか……！」

だ も ナントカしろコイツラ
.....。あ。疲れた。

心底脱力したオレの手の中で携帯が鳴った。誰だよ忙しいんだよ……
……あ、目暮警部。さっき会ったばかりじゃねーか何の用事だ？

「——はい、工藤です。どうされました？」

「工藤君！今のテレビ見たかね！？」

わあさすが警部スッゲータイムリ！。

「——ええ、東都大学祭の話題ですよ？」

「ああそれだ！工藤君はまだ大学にいるのかね！？」

「ええ、いますけれど……警部、何か事件ですか？昼間の事件は解決しましたよね？」

「何を言つとるんだね！キッドだよキッド！今夜は東都大学じゃあ後夜祭があるらしいじゃあないかね、奴がまた現れるんじゃないかと、キッド担当の中森警部達が大騒ぎだ。ワシも今から東都大学に向かうんだが、工藤君もそのまま其処におってくれんかね」

「目暮警部がいらっしゃるんですか？中森警部とは課が違うはずでは？」

「いや、ワシは工藤君と親しいから行くんだよ」

「？」

「ほれ、テレビに出ていたキッドが求愛している女の子、工藤君と

前編〱オメーら毎回毎回大概にしるよ！（後書き）

ずっとアップしたかった、東都大学の続編新一視点です！本当は一話短編の予定でしたが挫折して二話に分けました。読んでいただきありがとうございます！後編はしばしお待ち下さいませ〱（*^
^*）

中編「オメーらオレの知らない間に何してやがったんだ！」（前書き）

結局三部作になってしまいました……

中編　オメーらオレの知らない間に何してやがったんだ！

—— どうしてこんな事態になってるんだ。

時刻は午後七時。メインキャンパスは異様な熱気に包まれている。

毎年、後夜祭に参加する奴らってのは限られている。開始時間も遅いし、用事のある奴らもいるし、帰っちゃう奴らも多い。

そのはずなのに何だコレ。オメーら皆どっから湧いて出たんだ。下手したら全学生集合してんじゃないのか。

突然、周囲のライトが落ち季節外れの花火が夜空を彩った。学生達の歓声で溢れかえる中、ステージに幾筋ものレーザーライトが照らされる。

…… オレ今回初めてまともに後夜祭参加してるんだが、スゲーな滅茶苦茶大掛かりじゃねーか。

『皆さんこんばんは ！後夜祭司会は！引き続き勇者2号と仲田ケンジが担当しま す！』

キヤア仲田くゝん！と響く声援に、ヤツは余裕の表情で応えてやがる。何時からこんな人気者になっちまってんだ？隠れファンがいたのか？まあ元々人懐っこく愛嬌のあるヤツだったけど。

つーかそもそも！元を正せばこの騒動全部オメーのせいだろーが仲田アー！後夜祭開始直前、背後から襟首引つ掴んだオレに向かつて、満面の笑み浮かべて宣いやがって！『見た見た？オレの司会！スツゲー盛り上がり！内申点アップ間違いなし！何？見てない？ひつでーそれでもダチかよ！後夜祭の司会はばっちり見るよ？』だと！？ああ言われなくても見るよ見てやるよ見るハメになっちまってんだよ！！

今オレの隣には灰原と目暮警部、服部も当然傍にいる。さつきから灰原に近づく野郎共を蹴散らすのに必死だ。つとに灰原のヤロー下手に熱狂的なファンつけやがって！いくらオレが紳士だからって捌くのに限界あんだよ！

上空には月夜の中、警察や報道関係のヘリが幾多も飛び交い、会場の至るところで耳にイヤホンを着けた私服警察官や捜査員がスタンバイしている。マスコミの入場は禁止したはずだが、この様子ではどのくらいの人数が入り込んでいるのか判らない。

そんな状況は殆どの学生には知らされていない。にもかかわらず学生達が揃って一種異様な興奮状態にある。理由は明らかに、先程の

ニュースによる報道と、ミスコンを見た者達からの口コミ効果だろう。

派手な音楽が鳴り響く中、ステージ上では『ダンス選手権』と銘打ってそれぞれの技を競っている。確か仲田に聞いた進行予定では、この後は全学生でのフォークダンス社交ダンス入り交えたフリータイムに突入して、ラストは後夜祭メインイベントのベストカップル賞の発表だ。

今の所、キッドが灰原に近づいてくる気配はない。ってかそもそも来るのか？良く考えたら別に灰原は宝石でも何でもねーじゃねーか。予告状もないし。

まあ中森警部達の気持ちも分かるけど。最近めつきりキッドの出没機会は減ってやがるし、たまの予告も、狙われた先を調べたら不正や犯罪の痕跡が出るわ出るわ。そりゃキッドを逮捕するより狙われた先を逮捕するハメになるよな。ますますキッドの人気もうなぎ登りで逮捕しづらいらしいって目暮警部もボヤいてたし。

『——さて後夜祭のメインイベントは！ベストカップル賞の発表です！この二日間の投票で選ばれた5組のカップルとベストカップル、そしてカップル特別賞がありま〜す！』

おー！いつの間にやら後夜祭もラストだな。こりゃ今日は空振りだな。ま、これだけマスコミやら警察やらウロウロしてた。ヤツもそこ

まで馬鹿じゃねーだろ。

『では！まずはカップル賞からの発表でーす！』

仲田に呼ばれたカップル達が、冷やかしまじりのヤジや歓声が飛び交う中を照れながらステージに上がって行く。あーいいいよな平和な奴らは。無意識にため息を吐いたオレを隣の灰原が怪訝そうに見上げてくる。

灰原もなあ……もう少しオレの気持ちも考えて行動してくれたら、オレの心労も多少は減るんだよな……アレだ、連む相手がワリーんだよ。ゼツテー服部や黒羽や白馬達とは今後引き離さねーと。

オレが決意を新たにしている間にも、ステージ上ではサクサクと企画進行されて行く。仲田のヤロー、言うだけの事はあるな。ある意味これがアイツの天職かもしれねー。正直上手い。

『それではお待たせしました

！ベストカップル賞の発表で

す！今回は凄い結果になりました！なんと、投票期間二日間にも関わらず！このカップルへの投票は締切間際二時間に集中！なのにダントツの得票数でした！もう皆様わかりますね！？？？』

途端に沸き起る大歓声。視線が此方に集中した様な気がする。――

体なんだ？？

『ベストカップル賞は——！——東都大4年服部平次君！ア～ンド！本年度ミス東都！灰原哀ちゃん！——ん！——！』

——
は？

瞬間『わああああ！』と訳の分からない歓声と共にオレ達の周囲に観客が押し寄せて来る。目暮警部が必死に阻止しようとするが、とてもじゃないが止められない。

「——ッ灰原！」

とつさに握り締めた灰原の手が離れる。人波の隙間から、服部と灰原がステージ上に押し上げられたのが見えた。

『おめでとうございます服部君！哀ちゃん！どうですか今のお気持ち！？』

『………仲田ア、おんどれ仕組みよったな』

『人聞き悪いよ勇者1号服部平次！ホントスツゴい得票数だったんだから！哀ちゃん、おめでとう！』

『………アリガトウウレシイワ』

『うわ棒読み！』

拍手とフラッシュと歓声で溢れかえる中、ステージ中央では二人のインタビューが続いている。

何だソレ。

服部と灰原がベストカップル？なんで服部なんだよ。オカシイだろーが。しかも今気付いたんだが、灰原の着てる服って、この間服部が灰原に買ってきたヤツじゃねーのか？灰原、オメー受け取った時は興味無さげだったじゃねーか。

仲田の声が、周囲の歓声を抑えるかの様に一際大きくなった。

『そして皆様！今回のカップル特別賞ですが！！これはもう満場一致で決定しました！』

仲田が大きく息を吸い込む。

『前代未聞のダブル受賞！灰原哀ちゃんと――――月下の奇術――――』

師”こと怪盗キッド……!!”

………なに

っ!!!?

キャンパスが文字どおり揺れた。嵐の様な絶叫が飛び交う。耳のイヤホンからは『全捜査員！マルタイから目を離すな！』と中森警部の怒鳴り声が聞こえてくる。

しかしステージ中央には灰原と服部、司会の仲田しかない。最初はキッドコールを連呼してヤツの登場を期待した観客達も、やはりキッドは現れないのかと次第にざわめきが広がる。

『うーんやつぱり我々では彼に登場していただくのは無理みたいだよねー、哀ちゃん是非お願い!!”

嫌

『どーしてお願いこの通り!!”

『絶対に嫌よ。彼は見せ物じゃあないわ。それに泥棒の現行犯でもないのに捕まえようとするのにも納得いかないの。プライドがある

のなら、彼の予告を堂々と阻止すればいいのよ』

灰原の鋭い視線が会場の各所に配備された警察官達に向けられる。
イヤホンからは中森警部の『うぐっ！』という唸り声が聞こえてきた。

観客達からも灰原に懇願混じりの声がかかる。仲田は戸惑った様に灰原に頼み込んでいるし、服部は観客に『やかましわいワレエ！好き勝手ぬかすな！』と灰原をかばっている。ステージ上で晒されて板挟みになって——くそっ！やっぱ無理にでも帰らせるんだった！

人混みを掻き分けて灰原に近づこうとした瞬間。

その声は響いた。

中編　オメーらオレの知らない間に何してやがったんだ！（後書き）

読んでいただきありがとうございます（*^_^*）

後編「オメーの一番はオレだろーが！」（前書き）

長文です。申し訳ありません！

新一の暴走が許せる方は（afterシリーズの新一はこんなノリでテンションなんだと思ってサラッと）お読み下さい新一は最終的に幸せ（なハズ）です！

哀嬢至上話が許せる方はお進み下さいませ

後編　オメーの一番はオレだろーが！

皓皓とステージを照らしていたライトと、イベント進行を邪魔しない程度に流れていた音楽が、突然一斉に消える。

何事かと観客達がざわめき出すより早く、オレにとっては耳慣れた気障な声色がメインキャンパスに響いた。

『お待たせ姫』

全身に淡い月光を浴びて佇む姿は、間違いなく怪盗キッド。その身に纏う白い衣装は、降り注ぐ月の光だけで容易にヤツの存在を浮かび上がらせる。灰原を見つめるその表情までも。

『――どうして出てきたのよ』

囲まれている状況は貴方も分かってるんでしょう？と眉間に皺を寄せ、灰原は言う。その言葉にキッドは軽く笑い、大袈裟に肩をすくめる。

『愛する姫君お一人に、このような場で辛い思いをして頂きたくはないですからね』

『……………私は平気だって知ってるくせに』

『貴女の事を誰よりも理解しているからこそ、今、私は此处に姿を見せたんですよ』

月明かりの中、そつと手を取り、細く長い指先に口付ける。それはまるで映画のワンシーンの様に――

陶然と見入っていた観客達から、爆発的な歓声があがる。ヤツを目当てに後夜祭に参加した熱狂的なファンが多数いる中、その本人の登場に感激と興奮のあまり涙ぐむ者までいる。

「そこまでだ怪盗キッドオ!!」

警察官達を引き連れた中森警部がステージ上に駆け込んでくる。す

かさず予備マイクをパスする勇者2号仲田。ちなみに仲田は灰原とキッドの傍で常にマイクを構えている。……………こんな時になんだが、ぜってーこの類の仕事天職だと思っぜ仲田。あそこでマイクを構える根性に、ある意味感服する。やっぱオメーは勇者だ。

『これはこれは中森警部、最近ご無沙汰してましたが、お元気そうで何よりです。しかし月夜の散歩で出会うには、此処は幾分珍しい場所なのでは？』

『ふざけた事を！貴様の好き勝手な行動も今日これまでに！』

口角を上げて笑うキッドに向かって、中森警部がビシッと指差し吠える。

『おや、中森警部も野暮な事を。恋人との逢瀬を邪魔するものではないと思いますが？』

『……………誰と誰が恋人よ』

心底呆れた様子で、灰原はキッドを睨む。

そんな中、突然現れた警部達に、観客席から壮絶なブーイングが沸き起こる。曰く『折角現れてくれたキッドの登場を邪魔するな』という事らしい。その怒号混じりの大音声に、思わず怯む中森警部達。ヤツが相変わらず気障な仕草で、観客達を抑える素振りを見せた。途端、罵声は止みキッドへの喚声と変わる。

『焦らずとも——』

キッドが一枚のカードを取り出し、警部へ投げて寄越す。

『これは……………』

『予告状です。貴方との久々の対決を楽しみにしてますよ。——』

——そんな訳で今夜のところは諦めて下さい』

中森警部がカードの内容に素早く目を通す。

『そ……そうか。——よし！キッド！貴様の挑戦、受けて立ってやる！全捜査員引き上げだ——！』

灰原に言われた事を多少気にしていたのか『よし！正々堂々と今度こそ予告を阻止してやる！』と宣言しながら、どこことなくウキウキとステージ上から去って行く中森警部。————ってちよっと待て！なんだそりゃ！？『楽しみにしてる』なんてンなもんキッドの社交辞令に決まってんじゃないかねーか！この大掛かりな警備一体どーすんだ！？

そつと横目で目暮警部を見ると、展開についていけない様で呆然と

固まっている。そりゃそーだよなー課が違うのにオレ達と知り合いつただけでわざわざ出てきてコレだもんなー。あー公務員ってツレーかも。

周囲の騒ぎがひとまず落ち着いた所で、ステージ上では仲田によるインタビューが続いている。なんつーかホントめげないヤツだ仲田は。

『怪盗キッドさん！今回カップル特別賞を受賞した感想をお聞かせ下さい！』

『そうですね、光栄です』

『哀ちゃんもダブル受賞ですが！特別賞の感想は？』

『……………エエ、ホントトツテモウレシイ』

『もうその棒読み具合も哀ちゃんの魅力だよな！なんだか堪らなく可愛く思えてきたよ！』

『ええ全てが魅力的な方ですから。しかし、今回の賞で唯一物足りない点といえば、何故私と姫がベストカップルではないのかという事だけですかね』

『……………へエおもしろい事言うやんけ』

『おや聞こえてしまいましたか』

『マイク通して喋っという聞こえたもクソもあるかい！』

『まあお互い姫と一緒にこのステージ上に立てるだけで満足と思う事にしましょう。この光景を端から見ているだけ……なんて状況にでもなったら、堪らなく自分が情けなく甲斐性なく姫からまるで必要とされていない様で、心底惨めですからね』

.....
.....。

ジャカツ

「.....？『ジャカツ』.....。——くっ 工藤君！？」

「風向きよし距離よし残弾確認ターゲット捕捉完了」

「あ？え！ワシの銃！？いつの間に！！？」——待ちたまえ工藤

君！それだけは堪えて！とにかく落ち着かんかね！！」

「大丈夫！人には絶対当てませんから」

「その台詞いつぞやも聞いたが！そーいう問題じゃなくて...」

「しかし今回はあの後ろの柱にでも当たってしまったら、大変いい角度で跳弾するでしょうね。万一の事があっても不幸な事故、不可抗力というやつですが」

「お、お、落ち着きたまえ工藤君目が本気じゃないか！？」

「大丈夫ですよヤツならきつと跳弾だろうが流れ弾に次ぐ流れ弾の嵐だろうが全弾避けますよ。残念ながら悪運だけは人一倍強いでし

ようから。本当に心底残念ですがね」

「だからそーいう問題じゃあないんだ頼む後生だ考え直してくれ！
ワシを懲戒免職にする気か！？ワシには家族が待つとるんだ！！！」

………チツ、ホントに悪運のつえーヤツだ。ここに父さんの銃がない事を有難く思え。そして半泣きで縋り付く警部に心から感謝しろ。

『——では！東都大学祭のラストを飾る、恒例のカップルイベント！男性から女性へ！自分達だけのとっておきの愛情表現をお願いしま——す！』

オレ達の間には漂う不穏な空気を物ともせず、仲田はにこやかに司会を進めて行く。これもアイツの才能か………アイツは天然なのか確信犯なのかイマイチわかんねー。

観客達が期待を込めた瞳で見つめる中、ステージ上で服部は、溜め息をつきながら灰原を見る。

灰原は軽く肩をすくめる。

しゃ～ないなチヨイ我慢しとれ、と華奢な身体を抱き上げる。ミスコンの時に披露したというお姫様抱っことは違う、服部の左腕に灰原が腰掛けて座っている様な、灰原が小さな姿の頃から変わらない抱き方だ。昔は抱き上げると目線の高さが二人同じ位になったもの

だが、年月の経った今では灰原が服部を見下ろす形になる。

服部の抱き上げる、その手慣れていてしつくり馴染んだ仕草に、ミスコン時の“いつも抱いてもらってる発言”は真実だったのかと、観客から冷やかしの声があがる。

それを顎に手を添え見ていたキッドは、チラリとオレの方を見遣り、一瞬口元に笑みを浮かべた。

抱き上げられたままの灰原をチヨイチヨイと手招く。服部より頭一つは高い位置にある灰原の表情が怪訝そうなものになる。服部の首に手を絡めてバランスをとり、キッドに顔を近付け――

ちゅっ

服部と仲田が、その信じられない光景に啞然として固まった。灰原を悪戯っぽく見つめるキッドの口元には、いつもの笑みが浮かんでいる。

一瞬の沈黙の後に、観客達の悲鳴混じりの絶叫が響く。皆一様に興奮して『マジかよ服部とキッドとミス東都の三角関係！？』『スゲー！』『あんな二人に好かれて羨ましすぎる！』と口々に騒ぐ。

オレは瞬きもせず、妙に客観的な意識でその光景を見ていた。目の前で起こった事実が信じられず、脳が理解を拒否したのかもしれない。

そしてそれとは別の思考で、灰原が何かしらの絶対的な嫌悪をヤツに示すはずだと確信していた。

なのに。

灰原はただ、呆れた様な顔をして、『……貴方馬鹿じゃないの？』と呟いただけだった。

ザケんな

なんなんだ灰原

オレには、服部みてーに抱き上げさせたりしねーくせに

オレには、あの気障ったらしいヤツみてーに頬に口付けすらさせねーくせに

ホントふざけんなよ灰原

「おい」

気付けばオレは無表情でステージに上がっていた。『4年の工藤だ』『どうして工藤君が？』観客達の戸惑いがちなざわめきも、何故だかひどく遠く感じる。意識がボンヤリとした薄靄に覆われている様

だ。

オレの姿に驚いて服部の腕から降りた灰原を引き寄せ、自分の腕の中に閉じ込める。左手で逃げ出せない様に腰を強く引き、頬に右手を添え、顔を上向かせる。

「——目え閉じろ」

驚きに目を見張ったままの灰原。聞こえねえのかよ目え閉じろつつたろ。

構わず瞼に唇を寄せると、反射的に瞳が固く閉ざされる。

そのまま——

「「つと待て

！！！！」」

オレの腕の中から灰原の姿が消える。誰の仕業かは明らかだ――
――ゆっくりと視線を移して、傍らの常になくニヤケたツラを睨み
つけた。

「……………なにしゃがる」

「いやあ、余裕の欠片もない名探偵の姿も楽しいんだけどね。ちょ
っとやり過ぎじゃねーの？」

マイクに拾われない程度の声でオレに言い放つ。ヤツの相手をせず
灰原の姿を探すと、服部が灰原と手を繋ぎ、心持ち灰原をかばうよ
うに立っていた。二人の繋がれた手が、妙に目に焼き付く。服部が
冷や汗を浮かべつつ小声で話しかけてくる。

「く……くどー？チヨイ待て落ち着け？アタマれーせーにして、よー
考えてみ？」

「……………どけ服部」

「だから！落ち着かんかい！！」

その服部の後ろから、いつもの呆れた様な表情に戻った灰原の小さな呟きが聞こえた。

「……………工藤君、貴方熱でもあるの？」

——そのまるつきり他人事の様な冷静過ぎる言葉に、オレはもう何も考えられず、叫んだ。

『なんなんだ灰原オメーは！服部やコイツや白馬には平気で抱きしめさせやがって！オレとは手も繋いでくんねーじゃねーか！！オメーと一番長い付き合いなのも一番深い間柄なのもオレだろーが！！』

——キー……ン——

マイクのコイン音が、静まりかえったメインキャンパスに響いた。

あ……………？——オレ、今、何、言つて……………

ブはッ……………！

静寂の中、オレの傍からくぐもった声がした。

「……………クックックックッ……………！」

顔を手の平で覆い、片腹を押さえて必死に笑いを堪えるキッド。ちなみに服部は明後日の方を向いている。

「も…もーダメ限界、悪い哀ちゃん、今日は一旦帰るよ、また何時もの様に会いに行くから！……………クククッ」

……こうして東都大史上、後世に語り継がれるであろう大学祭の一日は、最後まで騒騒しいまま幕を閉じた――

「……ホンマ信じられんわ」

「有り得ん」

「普段外ヅラ取り繕つとるヤツほどキレたらエライ事になるっちゅーんは、ホンマやったんやな」

街灯に照らされた薄暗い歩道を歩きながら、服部が延々と言葉を連ねている。

……………もう何も言う事はない。てか言い返す気力がねー。

あれからは散々だった。

我に返ったオレは、目暮警部に頼み込み、必死にマスコミが隠し撮っていたテープやネガを回収。

今日という日が、夜のニュースで『工藤新一 醜態映像全国放送記念日（服部命名）』となる事だけは免れたが、人の噂だけはどうにもならない。オレも人並み以上に知名度はがあると自覚している。ついでにイベントシーズンには多種多様のプレゼントが届く位の人気はあるとの認識もある。

……………あのあと、名前も知らない女達から『どういう事！？』だの『盛り上げる為の仲田君とのヤラセよね！？』だの『信じてたのに！』だの『雑誌の記事では、同じ目線で歩める人なら好きになるっ

て言つてたじゃない！あのコ全然違つじゃない！』だの、ありとあらゆる吊るし上げを食らつた。本気でしばらく大学行きたくねえ。

元凶の一人たる灰原は、無言でオレ達の間を歩いている。

あの騒ぎの後、オレも服部もこのままでは灰原の身が危ないと感じて、仲田に頼んで早々に避難させた。案の定、オレも服部もその後すぐに取り囲まれ散々だったから、オレ達二人の判断は間違ひなく正解だったと思う。学生達が全員帰つたのを確かめてからオレ達は帰路についているので、現在時刻は限りなく真夜中に近い。

「……………工藤君、言いたい事があるなら言つてくれない？」

オレは無意識に灰原の顔を見つめていたみてーだ。相変わらず淡々とした表情で、怒っている様子を前を見据えて視線も合わさない。

ついだからと、ずっと心に引つかかっていた事を聞いてみる事にする。もうどーにでもなれだ。恥は掻き捨て世は情けだ（なんだそりゃ）。

「……………ミスコンの時。オメー、お姫様抱つこの相手指名した時、なんで服部を選んだんだよ」

「貴方あの場にいなかったじゃない」

——正論すぎてグウの音もでねーよ灰原！もうオレ自身、
なんでもあの時ミスコン会場にいなかったのか、なんであんなしょー
もねー動機の事件に関わってたのか、心底ムカツイて後悔してんだ
よりリアルタイムで！！

オレが更なる自己嫌悪に陥っていると、服部がようやく延々と続く
独り言を止めて、半分憐れみの籠められた目で睨んできた。

「大体、工藤みたいな超有名人が、なんであんな目立つ場所にわ
ざわざ出て来んねん。言いたい事あったんならオレらの家お隣サン
やねんから、帰ってから話したらえーやろ」

……………仕方ねーだろ。服部と灰原が東都大学生公認関係だなんて、
おまけにキッドと公認三角関係だなんて許せるかよ。しかもオレの
名前が全くカケラも噂になってねーし！ゼッテー許せねえし見逃せ
ねえ！フツー、オレと服部と灰原とか、オレとキッドと灰原とかだ
ろーよ三角関係って言うなら！！

オレは心の中でひたすら呟きながら夜道を歩く。ふと、隣の灰原の

足が止まった。

「灰原？」

斜め後ろを振り返ると、帰路についてから初めて灰原と目が合った。ズイツと細くて華奢な右手を差し出してくる。

「——はい」

「……………は？」

「手よ手！あんな人目のあるトコで、あんな大声で叫んで、ホント恥ずかしいったら……………」

今後ああいう場所で今日みたいに絶叫されたらこっちが迷惑するし恥ずかしいし貴方もイイ年した大人のクセにみっともないし！そのくらいなら、手を繋いだ方がよっぽどマシよ。

顔を思いっきり逸らし早口で喋りながらも、右手を更に差し出してくる。

オレがポカンとして突っ立っていると、

「嫌ならいいのよ別に！」

と灰原が手を引っ込めようとしたので、慌ててその手を捕まえる。

事件絡みでやむを得ない場面では、灰原の腕を掴んだり、爆発から抱き抱えて身を守ったりはしていた。だが、服部達のように髪に触るうとしても抱きしめようとしても手に触れようとしても、いつも避けられていたから。

繋いだ左手が、熱い。

「ずっとこいわ哀ちゃん！じゃオレ逆の手や！」

ホラホラ左手出してーな！と服部は自分の右手をピコピコ揺らす。

「…………貴方はいっつも勝手に繋いでくるじゃない」

「アカン！工藤一人なんてずっとこい！オレにも『繋いであげる』言うてもらわな！」

「貴方子供？」

「子供でもこの際えーわい！ホラ早よ言つてみいつて！」

「イ・ヤ・よ」

「チヨイ待ち！オレと哀チャンのあんだけ確かめあつた愛はどこ行つてん！？抱っこしまくりやつたやんけ！」

「さあ？散歩にでも行つたのかしら？無事に帰つて来るといいわね」

延々と続く二人の言い合いを聞きながら、根負けした服部が灰原の左手を取るまで、オレは落ち着いた気持ちで夜更けの月を見つめていた。

灰原が小さく『——今日だけなんだから』と呟いた言葉は、聞こえないフリをした。

お互いの手を握りしめ、それきり何も言わずに月明かりの中を歩き続けた。

数日後。

ふらりと阿笠邸にやってきた黒羽が、パリから帰国したばかりの白馬と、何時もの如く阿笠邸でくつろいでいた服部とオレの前に、一本のビデオテープを置いた。

いそいそデッキに差し込む黒羽――それは紛れもなく、どこから手に入れたのか東都大学・後夜祭のビデオ（ノーカット版）。

服部と黒羽はひたすら大爆笑、博士は啞然、灰原は我関せずと雑誌を読みながらコーヒーを口にして、オレはもう………脱力。

白馬が一言『公認四角関係……？しまった………僕だけ乗り後れた』と呟いた事だけ記しておく。

後編「オメーの一番はオレだろーが！」（後書き）

最初は白馬探偵もキッド捜査に参加してめでたく五角関係になる予定でしたが、彼は紳士な為出演辞退——ではなく彼が登場すると間違いなく四部作決定だったので泣く泣くエンディングのみの参加となりました。

ここまで読んでいただき感謝致しますー〇（ハハハ）〇ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6126b/>

東都大学大騒動after～新一の波乱万丈な一日

2010年10月9日13時15分発行